様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２１００２
研究課題名（和文）宗教実践と消費文化の人類学的研究―フィリピン民衆キリスト教の聖具消費と流通

研究課題名（英文）An anthropological study of Practices of Folk Religion and Consumption Culture in the Philippines.

研究代表者
川田　牧人（KAWADA, Makito）

中京大学・現代社会学部・教授

研究者番号：３０２６０１１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円、（間接経費）　　1,080,000円

研究成果の概要（和文）：モノとしての聖具は、生産、流通、消費の各側面において、稀少な真正品に価値をおくのではなく大量生産による模倣品の受容が前提となったシステムが成立している。そのような大量消費の主要な場となるのが都市祭礼におけるパフォーマンスと形象化であり、ここにおいては無数の模倣品が個々の所有者のそれぞれの文脈にしたがって多様に宗教的消費される。さらにその下支えとなるのは、聖像をめぐる不思議な話（奇蹟譚）という宗教知識のテキスト化である。聖像がモノとして個々人のお気に入りに装飾されるのと同様に、奇蹟譚において知識の面でカスタマイズされることを通して、真正品として消費されるのである。

研究成果の概要（英文）：In each aspect of production, distribution and consumption, the sacred materials provide a system that premise the acceptance of replica or fakes through mass production instead of evaluating rare authenticity. Main stage of mass consumption is the performance and figuration in town festivity, in which numerous replicas are consumed religiously in accordance with various contexts of each possessor. Further, this system is underpinned by textualisation of religious knowledge on miracle stories. As well as religious statues are decollated in favor of each possessor, religious knowledge are customized and personalized in miracles stories, and this is the way replica and fakes are turned to be authentic.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、　文化人類学・民俗学

キーワード：フィリピン　民衆キリスト教　消費　聖具　文化人類学

１．研究開始当初の背景

（１）近年、消費宗教論ともいうべき分野において、宗教活動を商品化する側面を捉える傾向、逆に消費行動の中に宗教性を読み込む研究などは次第にさかんになってきた。フィリピン研究の分野においては、消費社会・消費文化との関連において民衆キリスト教の世界と捉えようとする動きは顕著にはみられなかった。

（２）研究代表者はかつて、セブ州バンタヤン島のインテンシブ調査において、聖像祭祀や呪術的祈禱などの宗教実践において、じっさいに形象化・物質化されて信徒の目に触れられること、つまり可視性という作用の重要性を見出した。ここから、聖像や聖画、種々の祈禱用具といった宗教実践にまつわるモノ（本研究では一括して「聖具」と称す）に注目するという着想を得た。

２．研究の目的

（１）本研究の目的は、民衆キリスト教世界にみられる「聖具」が宗教的観念・知識を可視化させる作用を民族誌的に捉えるとともに、生活宗教における教義・教理の消費的理解や流通的受容の側面を人類学的に考察することである。

（２）世俗的価値観の動揺する現代社会において、大量消費から個人嗜好性へと変質しつつある消費性向は、フィリピン民衆キリスト教世界のなかで微細な実践としての聖像や祈禱用具などの「聖具」消費に如実にあらわれる。そこで本研究では、宗教的観念や教義的知識の直接的理解から、可視化される聖具という具体的モノを通した理解への転換をめざす。

３．研究の方法

（1）【方法一】モノとしての聖具（聖像、聖画、祈禱用具等）の流通経路：聖具がどのように生産され、どのように流通サイクルにのり、そして当事者の実際の生活においてどのようにあつかわれているかを明らかにする。

（２）【方法二】都市祭礼におけるビジュアル効果をともなったパフォーマンスや形象化：聖画や聖像の都市祭礼におけるビジュアル効果に、民衆キリスト教世界の＜可視化＞作用の特質を見いだす。

（３）【方法三】宗教知識のテキスト化：文字化されたモノとしての宗教知識と、その宗教知識が個人の聖具に対する経験をさらに具体化していく側面を掘り下げる。

（４）上記の諸点について、研究方法の基盤をインテンシブ・フィールドワークにおき、フィリピン・ビサヤ地方（セブ市）を中心とした地域での観察調査とインタビュー、画像収集調査（いかなるモノがどのように可視化されるかを画像資料をも用いて記録する）、ならびに文献調査等によって明らかにする。

４．研究成果

（１）【方法一に対応した成果の１】モノとしての聖具の流通経路の調査研究として、セブ広域都市圏（Metro Cebu）におけるサント・ニーニョ像の生産・流通・消費を追究した。まず生産過程においては、以下の諸点が明らかとなった。

①聖像製作に携わる専門職人（聖像師）は、近郊市街のタリサイ市に集中的に在住し、セブ市で販売されるサント・ニーニョ像の大半（ほとんどすべて）を供給している。

②聖像師にはおもに、木彫りと鋳型製造（セラミック、樹脂など）の二系統に分かれ、家系ごとに技術伝承がなされてきた。前者は個人技によるところが多く、逆に後者は集団による分業体制がとられることが多い。鋳型聖像師の中心人物のひとりは、現在の流れ作業の工程を整備した親方であり、家族親族に限定せず、多くの弟子を抱え育てた。その親方の工場が廃れた現在でも、その娘息子や弟子たちが現役で聖像製作を継承している。

③技術伝承には，秘匿性はあまりみられない。弟子筋の継承性は一定程度みとめられるが、セブ市内の聖像販売人が買い付けのために直接訪れたときにデコレーションの仕方などを見よう見まねで模倣することができる。つまり参入障壁の低さが広範な技術移転の要因となり、量産体制を支えている。

（２）【方法一に対応した成果２】流通過程には、以下のような特徴が見出された。

①サント・ニーニョの聖像はおもに、(1)教会付属のグッズショップ、(2)教会の外壁沿いに設置された Stall（小屋風売店）、(3)荷車にコンパクトに商品をならべる露天商、の三種類の販売ルートによって商われている。その他に町なかには聖具専門店がある。

②上記の三種類の販売所は、取り扱う商品や顧客サービスなどの側面において、概ね下表のような対照がみられる。

③教会付属のグッズショップは公認の販売所として、聖像が権威づけられ高価であるような印象を与えるが、鋳型製聖像の価格は売店と大差はない。ただ、売店や露天商では取り扱いづらい木彫聖像を扱っており、高級品志向の顧客のニーズを満たす。

④協会外壁沿いの小屋風売店は正規の営業許可を受けており、いくつかの派閥ごとに組合を結成するなど、組織的な側面がみられる。

⑤そのような拘束をきらった一群が荷車に載せられるだけの聖像を積んで移動販売

をはじめたのが露天商である。

⑥生産過程の（縮小）再生産として：とりわけ売店型の販売所では、補修だけでなく、客足がまばらなときは小像を手作業もしくは小規模な量産体制をとる場合もある。タリサイまで買い付けに行った際、聖像師の技術を「見て覚えた」という者が大半である（が、売店仲間間の横の情報交換も想定される）。

表：サント･ニーニョ聖像流通の三経路

	(1)GS	(2) 売店	(3) 露天商
値段（安さ）	△	○	◎
値引き交渉	×	○	◎
品揃え	○	◎	△
製作・補修	×	◎	○
得意客／観光客	観光客中心	得意客中心	得意客＜観光客
恒常性（安定性）	◎	○	×

（３）【方法一に対応した成果３】消費過程は、つぎのようにまとめることができる。

①購買者の多様なニーズとして、(1)値段に比例したハイグレードさ、(2)自分のリクエストに応じてくれる品揃え（バラエティ）と補修などのアフターケア、(3)何年も同じ販売者のところへ通える得意客（スキ）関係、(4)値段の安さと値引き交渉に応じてもらえる気安さなど、それぞれの販売ルートによって期待するものがちがっている。

②とくに補修などのアフターケアは継続的な関係を生成させ、聖具の消費過程が社会関係に繋がっていく契機となり得る。

③実質的な経済消費とは別の次元で、宗教的・儀礼的消費としては、年一度のシヌログ祭礼における聖像行列への参加、宗教経験の語りなどが考えられる。

（４）【方法二に対応した成果】都市祭礼におけるパフォーマンスと形象化に関する調査に関しては、以下の諸点があきらかになった。

①路上に聖像をしつらえたデコレーションや、路上ダンスチームのコスチュームや演目を通したビジュアル化作用は、宗教的イメージが民衆に受容されやすいかたちに形象化される側面をとらえる上で重要性をおびる。

②教会所属のオリジナルの聖像だけが正統づけられるのでなく、(1)（2)（3）の調査で明らかになった大量生産・流通･消費によって、無限に模倣品（コピー、レプリカ）が増殖しても儀礼的態度には遜色がないことが確認された。

（５）【方法三に対応した成果】宗教知識のテキスト化に関する調査研究にあっては、下記のような展開が見られた。

①模倣品であっても真正品とかわらず熱心な消費の対象となる根拠として、聖像との個別的関係や奇蹟譚によって個人的にカスタマイズされる側面について着眼することができた。個別的物語化によるカスタマイズの背景には、奇蹟譚のステレオタイプとして、教会を発信源とするテキスト化された宗教知識が背景にある。

②この個人的カスタマイズを支える宗教知識が醸成される媒体として、聖具にまつわる出来事譚を収集するとともに、教会や宗教団体が販売する小冊子等を比較した。それらは奇蹟譚の基本形を示し、ある意味で「公定奇蹟譚」のような役割を果たす。

③そのいっぽうで個々の経験が具体化される際には、「公定奇蹟譚」がそのままなぞられるだけではなく、むしろそれとの距離関係で個別に脚色され受容されながら、やはりカスタマイズされた宗教知識が鍵を握るとの洞察を得た。

（６）以上の総括として、方法一～三を通関する結論として、次のようにまとめることができる。すなわち、モノとしての聖具は、生産、流通、消費の各側面において、稀少な真正品に価値をおくのではなく大量生産による模倣品の受容が前提となったシステムが成立している。そのような大量消費の主要な場となるのが都市祭礼におけるパフォーマンスと形象化であり、ここにおいては無数の模倣品が個々の所有者のそれぞれの文脈にしたがって多様に宗教的消費される。さらにその下支えとなるのは、聖像をめぐる不思議な話（奇蹟譚）という宗教知識のテキスト化である。聖像がモノとして個々人のお気に入りに装飾されるのと同様に、奇蹟譚において知識の面でカスタマイズされることを通して、真正品として消費されるのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）
①川田牧人「書評『草の根グローバリゼーション』」『東南アジア研究』Vol. 51-No. 2: 328-331、査読有り、京都大学東南アジア研究所、2014 年

②川田牧人「〈教材〉としての枝下用水　～社会科副読本において枝下用水はどのように語られてきたか～」『矢作川研究』No. 17:45-54、査読有り、豊田市矢作川研究所、2013 年

③川田牧人「可視化される祭祀・崇拝」『CIAS Discussion Paper』No. 26: 64-72、査読なし、京都大学地域研究統合情報センター、2012 年

〔学会発表〕（計　１件）
①川田牧人「シンセイなる擬いもの―生産・流通・消費の諸活動からみたフィリピン・ビサヤ地方の聖像祭祀」日本文化人類学会（慶應義塾大学）2013 年 6 月 9 日

〔図書〕（計　１件）
①白川千尋・川田牧人（編）『呪術の人類学』人文書院、2012 年、322 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　川田 牧人（KAWADA, Makito）
　中京大学・現代社会学部・教授
研究者番号：３０２６０１１０

(2)研究分担者
（　　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　　）

研究者番号：